

進化論批評

— ダーウィニズムが文学について教えてくれること —

持 留 浩 二

〔抄 録〕

本論文は文学批評理論における比較的新しい手法である「進化論批評」について考察している。バラシュやキャロルといった批評家は新しい心理学の流れである進化心理学の観点から文学作品を読むことを提唱している。彼らは、科学者や宗教家と比べてより自由な立場にいる作家こそが最もよく人間の真の姿を理解しており、文学作品には普遍的な人間性が描かれていると言う。そこに描かれているものは生物学的な理屈に適っているのである。しかし進化論批評にも問題点がある。時々、生物学的事実と反するようなことが作品に描かれていることがあるのだ。作品内容のみに注意を向けるだけではこの問題を解決できない。より正しい解釈を行うためには、作品のみに目を向けるのではなく、作者や、作者とその周辺の環境との相互作用を考慮に入れることが必要になってくるのである。

キーワード 文学批評理論、ダーウィニズム、進化論、進化心理学、人間性

序論

文学批評理論と聞くと、どうも小難しい印象が先行し、出来ることなら触れずにそっとしておこうという気になる。歴史主義からニュー・クリティシズム、そして構造主義、ポスト構造主義、精神分析にフェミニズムへと、仮に順々に理解できたとしても、次にディコンストラクション理論がやってきて全てをぶち壊しにしてしまう。もしその理論の全てを理解し自分のものに出来たとして、そこで分かることは、完全な理論、全ての理論を包含するようなオールマイティーな理論などは存在しないということだ。それぞれの理論はそれぞれ別々の角度から研究対象を見た視点に過ぎず、全知の視点などというものは存在しないからである。

ではいつそのこと理論など完全に捨ててしまっ、あるがままに文学作品を読めばいいのではないか、純粹無垢な視点から作品を眺めればいいのではないかという気にもなってくるのであるが、この問題に関してデイヴィッド・バラシュ (David Barash) とナニーユ・バラシュ

（Nanelle Barash）は『マダム・ボヴァリーの卵巣』（*Madame Bovary's Ovaries*）の中でこう言っている。

ここで、文学を理解するために、理論的なものであれ科学的なものであれ、何らかの特定の観点がなぜ必要なのかということを手問うてみたくなる。なぜ我々はただ本を読み、ただそれをあるがままに受け入れることが出来ないのか？ 答えは簡単である。認めようが認めまいが、人間は常に解釈のレンズを用いているからである。例えばジョン・メイナード・ケインズは、エコノミストが「理論を使わずに」仕事をするとき、それはただ単に、彼らが、彼らの知らない他の誰かの理論の手中にあるということの意味しているに過ぎないのだと書いている。真に無垢な読者などというものはいない。それゆえに文学のエキスパートはその研究対象にアプローチするための新しく役に立つ方法を長い間探ししてきたのである。(10)

そしてバラシュの提唱するのがダーウィニズム的視点から文学作品を読み解こうという比較的新しいアプローチである。本論文ではこの新しい文学批評理論を検討し、この理論の長所、そして問題点を明らかにしてみたい。

I

バラシュと同じくダーウィニズム的視点から文学作品を解釈することを提唱しているジョセフ・キャロル（Joseph Carroll）は『リテラリー・ダーウィニズム』（*Literary Darwinism*）の中で自らが提唱するダーウィニズムに基づいた批評理論を「進化論批評」（“evolutionary criticism”）と呼んでいる。チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin）の進化論をさらに敷衍した生物学者のリチャード・ドーキンス（Richard Dawkins）は『利己的な遺伝子』（*The Selfish Gene*）の中で、我々人間にとって主人ともいうべき存在は、実は我々自身ではなく我々の遺伝子であることを明らかにした。ドーキンスによれば人間は遺伝子が操る「乗り物」（“vehicle”）に過ぎないのだ。主人は遺伝子であり、その遺伝子の目的は自らのコピーを出来る限り多く後世に残すことなのである。遺伝子がコピーを後世に残すために必要なことは二つ、生存と繁殖である。まずその遺伝子を持つ個体が生き延びることが出来なければ遺伝子は絶えてしまう。さらに異性のパートナーを見つけ、繁殖に成功しなければ、その代でその遺伝子は絶えてしまう。というわけで遺伝子は「乗り物」である我々を操って、その生存と繁殖という二つの点で我々をそれぞれが他の個体よりも有利になるように進化させてきたわけである。もっと正確に言うと、そのような方向で他の個体よりも有利なように進化してきた個体のみが生き延びて現在の我々に至っているわけである。

新しい理論というのは、その理論以前に大きな力を持っていた理論に対してアンチテーゼの形をとって現れてくるのが常であるが、キャロルは完全にポスト構造主義に対して反対の立場をとっている。ポスト構造主義は長らく文学批評理論の世界において大きな力を持ち続けた。ポスト構造主義者は世界を捉えるときに、言語、記号を前提にしていた。そしてそれは、それ自体自律的なものであり、その内部に全ての法則が組み込まれており、外部世界はさほど重要ではなかった。それに比べコンラッド・ローレンツ (Konrad Lorenz) などの進化論者は、物質的な外部世界こそが実体であると主張する。そしてその周囲の環境に適応するために内的なものが形成されていくのだ。自らを反ポスト構造主義者であると言うキャロルは、ポスト構造主義批評に対して手厳しい批判をしている。

もし私の主張が基本的に正しければ、過去20年間になされた批評理論における仕事のほとんどが、ただの時代遅れというだけでなく、本質的に無駄であったということが分かるだろう。それは、のちに先駆者ということで全ての名誉を授けられることになるような、発展していく学問分野の初期段階と見なすこともできない。それは本質的に誤った方向であり、行き止まりであり、誤解に基づいた企てであり、錯覚の倉庫であり、無駄な努力であったのだ。(25)

ここでキャロルが言っている「過去20年間になされた批評理論」とは当然のことながらポスト構造主義批評を指している。

ポスト構造主義的な主張の中には、現実の世界の実体とかけ離れた主張と思わせるようなものも多く見受けられる。サピア・ウォーフ仮説のような考えはその典型であるが、進化心理学者のスティーブン・ピンカー (Steven Pinker) は『言語を生みだす本能』(*The Language Instinct*) の中でサピア・ウォーフ仮説の間違いを指摘している。サピア・ウォーフ仮説とは、言語が話し手の思考を大幅に規定するという言語決定論である。ピンカーは、言語決定論には科学的根拠がないとした上で、「思考の仕組みが分からず、どこから研究の手をつけたらいいのかさえ分からなかった時代には、言語が思考を規定するという説もそれなりに魅力があった。思考より言語の方が見えやすく、とっつきやすかったからだ。しかし、認知科学が進歩して、思考の仕組みにどう取り組めばいいかが分かってきた今となつては、言語と思考を同一視する説の魅力も薄れてきている(78)」と言語決定論を前時代的なものとして切り捨てている。

キャロルは、ポスト構造主義者が人間性を制約する生物学的な考えを受け入れなかったのは、それが彼らの政治的改革的幅を狭めてしまうことになるからであったと主張する。彼らの政治的主張は無政府主義的なユートピア主義であって、それゆえポスト構造主義者たちは当時の政府へのラディカルな反対の考えを取り入れていくことになる。ブルジョワへのマルクスの敵意や西洋文化一般のヘゲモニーへの反対、ラディカル・フェミニズムや好戦的なホモセクシュア

リティーなどである。批評家のテリー・イーグルトン（Terry Eagleton）は『文学とは何か』（*Literary Theory*）の中で、政治批評、つまり全ての言説は政治的であるという批評的立場から、ポスト構造主義における「ディコンストラクション」という中心的な手法とそれを提唱したジャック・デリダ（Jacques Derrida）について次のように言っている、「彼（デリダ）にとってディコンストラクションは究極的には政治的实践であり、ある特定の思想体系がその力を維持し、そしてその思想体系の背後で政治構造や社会制度の全てのシステムがその力を維持する論理を解体しようとする試みなのである（128）」。つまり新しく何かを新しく作り出すというよりは、反政府運動のように何かに反対するというところに主眼が置かれたのがポスト構造主義であったというのだ。

ポスト構造主義が生まれた動機がどのようなものであれ、確かにポスト構造主義は新しいパラダイムは生んでこなかったように思う。その辺りに対する不満をキャロルもバラシュも抱いており、彼らは新しいパラダイムを求めてダーウィニズムに行き着いたのだ。もちろん彼らは偶然にダーウィニズムに行き着いたわけではない。彼らはドーキンスの動物行動学から端を発して進化心理学へと発展していく現代科学における大きな流れの真っ只中にいた。進化心理学から世界を見たとき、ダーウィンの進化論という実にシンプルなアイデアから、それまではうまく説明がつかなかった実に多くの複雑な現象が科学的に説明できるのである。心理学といってもその学問領域はかなり広いが、精神分析などと比べると進化心理学はかなり自然科学に近いところに位置しており、ある意味ポスト構造主義とは正反対の位置にある。おそらくキャロルやバラシュがダーウィニズムに魅力を感じた理由は、ポスト構造主義といった極めて複雑で曖昧で現実には則さないアカデミズムと比べて、ダーウィニズムの考えは極めて明快で現実的で自然科学に則っているというところにあるように思われる。

II

バラシュの書いた『マダム・ボヴァリーの卵巣』は全十章からなっている。第一章でダーウィニズム的に文学を研究することに関する簡潔な解説が書かれており、残りの九つの章で様々な文学作品が実際にダーウィニズム的な観点から解釈されている。ここではまず第一章を取り上げ、ダーウィニズム的文学批評に関して分かりやすくまとめてみたい。

バラシュはまず『オセロー』（*Othello*）のような作品が、今なお生まれ、上演されて続けているのは、その作品が時間に縛られない普遍的なもの、我々人間に共通の人間性を語っているからだと言う。『オセロー』は嫉妬深い男についての話であるが、嫉妬は人間が広く持っている感情である。このように、我々がマダム・ボヴァリーやハックルベリー・フィンについて現在形で語ってもよいのは、これらがまさに普遍的なものを語っているからなのだ。そしてその人間性というものは生得的なものであり、社会的に作り上げられたものではない。それは恐ろ

しいほどの長い生物の進化の中で形成されてきたものであり、我々の遺伝子の中に組み込まれているのである。

この主張は実は西洋においてそれほど簡単に受け入れることの出来るものではない。哲学者ジョン・ロック (John Locke) の経験論以来、西洋社会の多くの人々は人間の心は空白の石版であると考えてきた。ピンカーの著書『人間の本性を考える』(The Blank State) の原書のタイトルは「ブランク・スレート」であり、日本語にすると「空白の石版」となる。ピンカーはこの著書の中で、この問題を取り上げ、人間の心は生まれつき白紙状態であり、その後の様々な経験によって人間性が形成されていくというブランク・スレート説を全面的に反駁している。

『人間の本性を考える』の中に驚くべきデータが載っている。ピンカーによると、アメリカではユダヤ・キリスト教の原理主義的な考え方が未だに一般的であり、2002年出版時の世論調査によれば、アメリカでは聖書の創世記を信じている人が76%、聖書に書かれている奇跡は実際にあったという人が79%、天使や悪魔やそのほかの霊的な魂を信じている人が76%、自分は死後も何らかの形で存在するという人が67%を占め、ダーウィンの進化理論が地球上の人間の起源を最もよく説明すると考えている人は15%しかいない(2)。

もちろん科学的素養のある人が聖書の創世記を実話として信じることは不可能となっている。しかし現代の知識社会においてなおブランク・スレート説は優勢なのである。そして人々のブランク・スレート説に対する信奉は、理性的な判断よりも感情的な反応から来ており、そのために科学者の目も曇らされてしまっているとピンカーは主張する。「ちょうど宗教の中に人間性の理論が含まれているのと同じように、人間性の理論は宗教の機能のいくつかを引き受けることになる(2-3)」と『人間の本性を考える』の中でピンカーが言うように、宗教からの人間性に対する考え方と科学からの人間性に対する考え方の間で今までもしばしば摩擦は生じてきたし、今も生じている。それは互いが互いに決して無視することの出来ない極めて重要な価値を認めているためであろう。

そんな中、文学を含む芸術は比較的自由的な立場にあった。芸術には客観的な論証など求められることもなければ基本的にモラルを求められることもない。それで科学とは距離を置いた芸術家こそが真の人間の姿を理解しているとピンカーやキャロルやバラシュは言うのである。バラシュは、文学と人間性とを結びつけることはそんなに新しいことではなく、実際最も人間を正確に映し出しているのは文学であったと言っている。「例えば、心理学は、100年前にはまだ存在していなかったし、20世紀のほとんどの期間、半ば神秘的なフロイトの神話解釈とジョン・ワトソンとB・F・スキナーの不毛な行動主義という同等に役に立たない二つの極の間に引き裂かれていたのだ(3)」。キャロルも「つい最近まで文学そのものが人間性に関する情報の唯一の巨大な宝庫であった(109)」と言っており、ピンカーも『人間の本性を考える』の中で「逆説的であるが、今日の知的風潮の中にあっては、小説家の方が科学者よりも人間性につい

ての真実を語る上でより自由な権限を持っているのかもしれない(425)」と言っている。

実用的な学問が優勢を占める現代、文学研究の意義はなかなか見えにくい。しかも文学批評理論について言うと、ポスト構造主義があらゆる価値を相対化してしまい、確固とした価値観が長らく文学研究に見出せなくなっていたところもあるように思う。しかしもし文学研究を進化心理学と結びつけることにより人間性解明に何らかの形で寄与することができるなら、文学研究にとってそれは実に画期的なことであると言えるだろう。

話をバラシュの『マダム・ボヴァリーの卵巣』に戻そう。バラシュによると、普遍の人間性は数千年前に偉大なるストーリーテラーによって認識されていたが、ダーウィンが出てきて初めてその人間性の科学的根拠が明らかにされた。この進化論という科学的な根拠を用いることによって、文学作品に描かれているものを、より正確でより深く我々は理解できるのではないかというのがバラシュの主張なのである。進化論によると、適者生存の世界の中で生き残るために人間は最大限うまく環境に適応するために行動し、自らの遺伝子を後世に残すべく全力をあげている。もちろん人間は意識的に、生存の可能性を最大限にしようとか、できる限り子供を多く持とうとしているわけではない。我々は生存と繁殖に長けてきた祖先の遺伝子を受け継いでいるため、無意識的に、環境に適応することにより生存と繁殖に成功する可能性を高めるよう行動しているということなのだ。

バラシュが『マダム・ボヴァリーの卵巣』の中でやろうとしていることは、進化心理学者が進化論的観点から人間の行動の様々な現象を説明していく手法を文学作品の中でも使おうということなのである。人間の様々な行動を進化論的観点から説明することは随分と行われてきたし、それまで説明がつかなかったことに関して説得力ある説明が可能になり、大きな成果が出ている。例えばピンカーは『心の仕組み』(How the Mind Works)の中で、フロイト(Sigmund Freud)の有名なエディプス・コンプレックスの間違いを指摘し、「親子間対立」

("Parent-Offspring Conflict")という進化心理学的観点からフロイトを悩ませたような親子の問題を解き明かしている。

しかしながら進化心理学を文学作品の中に描かれた世界に使うとなると、多くの人々から抵抗が出てきそうだ。というのもフィクションの中の世界と現実の世界を同様に扱うことが果たして妥当なことなのかどうか誰も迷うだろうからである。その点に関してバラシュは次のように述べている。

ドストエフスキーのイワン・カラマゾフは「神がいなければ全てが許される」のではと心配したが、人間性がなくても全てが許されてしまうことになる。人々が食べたり、眠ったり、互いにコミュニケーションをとったり、あるいは子供を産んだりすることのない想像上の世界を作り上げることは可能だろうか。性的アイデンティティや自らの子供や親類を優先的に気遣うという傾向や、愛、怒り、競争、そして協力に関する予測可能なパター

のない想像上の世界などというものが可能だろうか。その結果は、一種のSF、もしくはとんでもないファンタジーになってしまうだろう。しかしながら注目すべきことは、そのような極端な非人間性という想像上の逸脱はめったに受け入れられるものではないということである。おそらくほぼ完全に受け入れられない。というのも、そのような我々が認める人間性からの完全な逸脱した姿というのは、描くのが困難なだけでなく、真に理解不可能だからであり、興味深いものとはならないだろうからである。(6-7)

バラシュは、偉大な作家というのは、それが書かれる以前から、書かれた後、さらにその作家が亡くなった後までもずっと生きていくかのようなとてもリアリティー溢れる登場人物を描くと指摘する。我々がフィクションを読んでいて、その登場人物が現実にもいそうな気になるのは、その人物が人間性を見せるとき、つまりその人物が、生物学が予想する通りに行動するときなのだと言っている。つまりフィクションにもノンフィクションと同じだけの生物学的なリアリティーがあると考えていいということなのだ。

ノンフィクションにもフィクションにも同様に普遍的な人間性が描かれており、同じだけのリアリティーがあるのだと言われると少々反論したくもなってくる。しかしリアリティーに関して言えば、そのリアリティーはあくまで人間性についてのリアリティーであって、バラシュは何も奇想天外なSF小説やファンタジー小説の内容自体にリアリティーがあると言っているわけではない。言ってみればノンフィクションとフィクションは、絵画で言えば具象画と抽象画のような違いがあるのかもしれない。ノンフィクションは対象をできる限りあるがままに映し出し、フィクションはそれをデフォルメした形で映し出す。表現形式は違っているが、どちらも人間性という対象の真の姿を映し出しているのである。

よく考えてみると、リアリティーの問題に関して言えば、精神分析批評やフェミニズム批評など多くの批評理論も同じ問題を抱えていることが分かる。フロイト的な精神分析批評をする批評家は作品の中にエディプス・コンプレックスを見出し、フェミニズム批評をする批評家は作品の中にロゴス中心主義や男性社会に抑圧される女性の姿を見出すのかもしれないが、どちらも実社会で行うのと同じ分析を作品の中に持ち込んでいるわけである。それが可能であるのは、批評するに値する価値を持つそれぞれの文学作品が実社会と同等のリアリティーを持っているという前提があるからで、その前提を進化論批評にのみ認めないわけにはいかないだろう。バラシュは文学作品が持つリアリティーについて次のようにまとめている。

しかしながら重要なことは、文学には、あらゆる表現の自由があるにもかかわらず、美術の抽象表現主義の文学における等価物、つまり見たところ現実社会と全く無関係の言葉の羅列などといったものはほとんど存在しないということなのだ。あるいは、文学と、精神科医が言うところの「ワード・サラダ」、つまり精神分裂病患者が使うようなランダムで

無秩序な言葉使いの間にある大きな違いについて考えてみるとよい。大切なところは、文学は、印象的で主観的にはあるけれども人間を扱っているのであり、人間性は（ちょうど言葉の性質と同じように）、比較的限界がなく順応性のあるものであるとしても、ある一貫したパターンを辿るものであるという点である。(11-12)

ある時代に一世を風靡した作品が次の時代になると全く見向きもされなくなることはよくあることである。そういう浮き沈みがあるにせよ、バラシュが言うのは、人間性を正しく表現している作品、生物学の基本的な考えに則った作品というのは基本的に生き残る力を持っている、つまり今生き残っている文学作品は生物学のルールに従った内容を持っている作品であるということなのだ。500年以上も前に書かれたシェイクスピアの作品に出てくる登場人物を我々が理解することが可能なのは、そこに普遍性から来る信憑性があるからなのだ。

III

これまでバラシュが主張する進化論批評についてまとめてきた。実際に文学作品を進化論批評で解釈する時、批評家は、まずプロットとキャラクターを分析し、その物語が進化心理学の考えに則った形で進んでいくことを論証しようとする。ではそこに問題がないのかといえばそうではない。キャロルの『リテラリー・ダーウィニズム』は進化論批評に関する問題点を指摘している。これからそれらの問題点について考えてみたい。

まずキャロルは、文学作品の作者が進化心理学に則るようなやり方で人間の行動を表現していると進化論批評の批評家が前提していることに対して懸念している。とはいえ、かなりの程度までその前提は正しいとキャロルは認めている。さらに作者は自ら意識しなくても、本能的に進化心理学が作者の行動原理になっているのだとキャロルは言う。「もし人々が進化心理学を例証するようなやり方で行動するならば、そしてもし作者が賢明に現実的な人間行動の描写をしているなら、作者の信念の体系がどんなものであろうと、彼らが語る物語は、進化心理学を例証するようなものになる傾向は強いだろう(38)」。

しかし続けてキャロルは時にはそうならないこともあり、その逸脱は標準的事例同様に興味深いものであると指摘し、次のように言っている。

表現されている物語の内容を考察するにおいて、我々はいかに個人的あるいは文化的のファクターが人間行動の表現に影響を与えているのかを考慮に入れる必要がある。少し例を挙げると、センチメンタルな理想主義、シニシズム、ユートピア的ファンタジー、性的逸脱、そしてその他の形の精神的特異性が具体的な物語の中で描かれている様々な行為に影響を与えていることが見られるのである。(38-39)

つまり作者個人の、あるいはその作者が属している社会の文化的ファクターが、彼の創り出す物語に、人間性を逸脱すること、つまり生物学的には事実と反するようなことを書かせる場合があるということなのだ。作品のみを読むだけでなく作者や作者を取り巻く環境をきちんと考慮に入れない限り正確な分析は出来ないということになる。つまり表現されている登場人物の行動が文学テキストの中で分析されるべき唯一のファクターではないということなのだ。「口調、視点、文体として現れる作者の存在は全て文学作品の中で極めて重要な意味を持っている(39)」とキャロルは言う。物語の作者の存在は極めて大きな位置を占めているのだ。口承で語り継がれてきた単純なフォークロアは一見その例外であるかのように思われるが、キャロルによるとそのような物語でさえ集合的な文化の視点というものを持っているということになる。

我々は、作者が属している文化の集合的エトスと作者の気質との間の相互作用、これは往々にして敵対的、否定的であることが多いのだが、に目を向けるべきなのである。進化論批評は、その分析対象を表現されているプロットやキャラクターのみに限定すべきではない。いかにして文学テキストの中で意味が形成されるのかということに関してもっと基本的な問いを発するべきであるし、作者の個人的な心理を考慮に入れる必要がある。作者が彼らを取り巻く文化環境と相互作用する様子を考慮に入れる必要があるのだとキャロルは指摘している。

キャロルの言う問題点は確かにもっともな指摘である。これは何も進化論批評にのみ必要な留意点というわけではない。例えば精神分析批評を行う場合においても、研究対象となる作品の作者の伝記的事実を全く無視するわけにはいかないだろう。作品と作者は密接に結びついており、作者はその生活史と密接に結びついている。そういう作品以外のコンテキストを一切取り除いて、作品の中で描かれているものに、それが無意識的に象徴していると考えられるものを機械的に当てはめていったとしても、それが説得力ある批評とはならないことは明らかだ。どのような理論であれ、ある特定の理論を使うときの落とし穴はまさにそこにある。その理論を使うということは、その批評家はその理論に全幅の信頼を寄せていることがほとんどであろうから、ついついその理論を一般化してしまう傾向が生じる。しかし実のところ全知の視点などというものがありえないのと同じように、オールマイティーな理論というものもありえないのである。理論の一般化の危険性には常に注意を払う必要がある。

キャロルは、進化論批評を行う場合には、作者の存在が極めて大きいこと、それゆえ作者の個人的ファクター、あるいは文化的ファクター、さらには作者とその周囲の文化環境との相互作用に目を向けるべきであると言っていた。口承で語り継がれてきたフォークロアの場合でさえ集合的な文化の視点はその物語には内包されているのだと。ここでは批評家ではなく動物行動学者であるマーティン・デイリー (Martin Daly) とマーゴ・ウィルソン (Margo Wilson) の『シンデレラがいじめられる本当の理由』(The Truth about Cinderella) を取り上げ、

実際にキャロルの指摘する問題点について考えてみたい。彼らはフォークロアに近い『シンデレラ』の物語を進化心理学的観点から分析しており、そこには実に驚くべき研究結果が載せられている。

『シンデレラ』の物語では主人公シンデレラは継母によってひどい虐待を受けるのだが、実は現実社会でも同じことが起きているのだとデイリーとウィルソンは言う。全米人道協会 (American Humane Association) の調査によると、1976年のアメリカで、片親が実の親で、もう片親が継親である3歳未満の子供は、実の両親と暮らしている子供に比べ、虐待される危険が7倍も高かった。さらに虐待の結果死に至った事例に絞って計算すると、片親が継親の時は、両親ともが実の親であるときと比べて、およそ100倍も危険率が高かったのである。『シンデレラ』の物語が事実を反映していることが分かる。

なぜステップ・ファミリーで虐待が起こるケースが多いのかというと、これは進化論的には簡単に説明がつく。本論文の最初に触れたように、人間が生きる目的は自らの遺伝子のコピーを出来るだけ多く後世に残すことである。血のつながっていない、よって自分の遺伝子を受け継いでいない子供を無事に育て上げたとしても、自分の遺伝子のコピーを後世に残すことにはならない。それどころか本来自分の血のつながった子供を生み育てるための貴重な資源を継子のために使うというのは進化論的な理屈に反することなのだ。そこで虐待が起こる、継子にひどい仕打ちをし、なるべく早く家を出て行くように仕向けることによって、継子には出来るだけ資源を使わないようにする。あるいは最悪の場合、継子を死に至らせてしまう。

このデイリーとウィルソンの研究で注目すべき点がある。キャロルが進化論批評の問題点として指摘していたこと、物語の中には時々生物学的事実と反することが書かれている場合があるという事例がまさに『シンデレラ』の中に見られるのである。デイリーとウィルソンの調査によると、継親のうち、実は継父の方が継母よりも子供にとっては大きな脅威になることが多い。継父による虐待の方が数も多く悪質である場合が多いのだ。例えば性的虐待などに関しては継母よりも継父によるものが圧倒的に多いのである。なのに『シンデレラ』では継母によるシンデレラへの虐待が描かれているのである。『シンデレラ』のようになかなか語り継がれてきた物語が価値のない薄っぺらな物語であるはずはなく、この生物学的事実と反している部分には何か意味があるはずなのだ。キャロルは作者の個人的ファクター、文化的ファクター、あるいは作者とその周囲の環境との相互作用に注意を向けるべきであると指摘していた。『シンデレラ』の場合、口承文学に近いので、誰が誰に語りかけてきたのかという点が重要になってくる。デイリーとウィルソンはその点に注目し、実に明快な形でこの謎に答えを与えている。

デイリーとウィルソンによると二つの理由があるという。一つは、今の時代に比べかつて継母はそれほど珍しい存在ではなかった。20世紀になるまで、ヨーロッパやアメリカでは、離別より死別の結果ステップ・ファミリーが形成されることが多かった。また小さな子供がいる母親が出産やその他の原因で死ぬことも多かった。そして残された夫が自ら子供を引き受けるこ

とになり、新たに子供たちの母親代わりの女性を迎えることになったのだ。つまり一つ目の理由は継母の方が一般的であったので、『シンデレラ』の物語もそちらの形態をとることとなったという理由である。さらにもう一つの理由についてデイリーとウィルソンは以下のように指摘する。

シンデレラや白雪姫が継父にではなく継母によっていじめられるもう一つの考えられる理由は物語の語り手の家族内での目的と関わっている。もし物語が世代を越えて残っていくものであるなら、その物語は聞き手のみならず語り手にも訴えかけるものがなくてはならない。では、その物語を、語る価値のあるものとする語り手は誰だったのか？ そして聞き手は？ もし主たる聞き手が小さい子供であれば、『シンデレラ』や『白雪姫』のような物語の場合であればそうであろうが、主たる語り手はおそらくその母親である。するとその母親は、「お前のお父さんが死んじゃったり、家を出て行ったりして、お母さんが再婚したら、お前は大変な目に合うよ」とささやくよりは、「いいかい、考えられる限り最悪のことは、お母さんがいなくなって、お父さんが新しいお母さんを連れてくることなのよ」というサブテキストを含む物語をより好むであろうことは想像に難くないのである。(62)

この解釈はなかなか鋭いものであると思うが、それ以上に注目すべきは、物語のみならず、キャロルが言っていたように物語以外のコンテキストを考慮に入れることにより、より広い視野からの解釈を可能にしているという点である。このように、物語の語り手の意図、聞き手の意図、そして物語が語られている時代や環境が幾重にもなってフィクションを作り上げていくのだとすれば、批評家による解釈の作業も一筋縄ではいかないだろう。とはいえ、表面的なストーリーのみを追うのではなく、その水面下でうごめく様々なファクターを見落としてはならないのである。

結論

長らく文学批評理論の世界で大きな力を持ち続けてきたポスト構造主義への反動としてキャロルやバラシュは進化論批評を提唱している。ブランク・スレート説に代表されるような、ポスト構造主義的とも言える、物質的な外部世界への軽視に反論するような形で、ピンカーのような進化心理学者たちは新しい認知科学の波を作り上げているが、キャロルの進化論批評もこの新しい波の一部であると考えられる。

バラシュによると、文学作品には普遍的な人間性が描かれているが、その普遍的な人間性は生得的なものであり、生物の進化の中で形成され遺伝子の中に組み込まれているものである。

そして科学者や宗教家に比べてより自由な立場にいた芸術家こそが最もよく真の人間の姿を理解しているとピンカーやバラシュやキャロルは言っている。

進化論批評は、文学作品の中に描かれている人間性を進化心理学的観点から解明していく批評理論である。そこで物語に描かれている世界に真の人間性が描かれていると言えるのかどうかという問題が浮上するが、バラシュはフィクションを我々が読んで説得力を感じるのは、まさにそこに真の人間性が描かれているからであり、フィクションにも生物学的リアリティーがあると考えてよいと主張する。

一方キャロルは進化論批評における問題点として、時に文学作品には人間性を逸脱したことや生物学的な事実と反することが描かれることがあると指摘している。正しい解釈を行うためには、デイリーとウィルソンによる『シンデレラ』解釈に見られるように、作品のみに目を向けるのではなく、作者や、作者とその周囲の環境との相互作用を考慮に入れることを忘れてはならないのである。

文学批評理論は、それぞれの時代のパラダイムと結びつき、作品の中に描かれた世界を解釈してきた。マルクス主義、構造主義、ポスト構造主義、精神分析、フェミニズムなど数え上げるときりがない。序論で述べたように、それぞれの理論はそれぞれ別々の角度から作品を見た視点に過ぎず、全知の視点がないように完全な理論もありえない。では進化論批評を提唱したところで、また一つ別の視点が仲間に加わるだけではないかと思われるかもしれない。確かにその通りだが、この視点は人間性を解明する上で相当有力な視点なのだ。フロイトのエディプス・コンプレックスにとって代わる理論を提示したことからもその一端は窺える。しかも文学研究の側が一方的に恩恵を受けるだけでなく、もしかすると文学研究の側から、人間性の解明において、進化心理学に何らかの貢献が出来るかもしれない可能性をも秘めているのである。まだまだこの理論を追究する価値はあると言える。

【引用文献】

- Barash, David. P., and Barash, Nanelle. *Madame Bovary's Ovaries: A Darwinian Look at Literature*. New York: Delacorte Press, 2005.
- Carroll, Joseph. *Literary Darwinism: Evolution, Human Nature, and Literature*. New York: Routledge, 2004.
- Daly, Martin, and Wilson, Margo. *The Truth about Cinderella: A Darwinian View of Parental Love*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1998.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 2nd ed. Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1996. Blackwell Publishers, 1983.
- Pinker, Steven. *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: William Morrow, 1994. New York: HarperCollins, 2000.
- Pinker, Steven. *The Blank Slate: The Modern Denial of Human Nature*. New York: Viking, 2002. New York: Penguin Books, 2003.

（もちどめ こうじ 英米学科）

2006年10月19日受理